学生の知的好奇心を引き出す授業実践

―大阪商業大学における「おすすめ」を紹介するプログラム―

橋　本　信　子

1　これまでの実践と課題
1－1　学生が取り組もうとする課題の条件
1－2　知的交流が生み出す能動的学習態度
2　学生の知的好奇心を引き出す授業実践
2－1　実践のねらいと検証の方法
2－2　実践方法
2－2－1　新聞を通して社会への関心を高める
2－2－2　おすすめの参考図書、雑誌記事を紹介する
3　実践の効果とその要因
3－1　学生はどのような分野に関心をもったか
3－2　実践の効果
4　知的好奇心を引き出し、知的交流を生み出す要素
4－1　空間（設備、施設）
4－2　人
4－3　仕掛け
おわりに
参考文献

はじめに　―本稿の目的―

大学は学生が卒業後に自律・自立した人間として社会に関わっていく能力を身につけることを支援していく教育機関である。学生の希望する進路や追求したい分野について体系的に学ぶ機会を提供し、同時に学問の多様性を学ぶ機会を提供し、さらには自分が社会とどう関係するのかを考える機会を提供する責任がある。

学生に接していると、社会的なできごとに関して知りたい、わかりたいという欲求や潜在意識があることを感じさせる場面が多々ある。だが、漠然とした、あるいはうっすらとした関心を知的好奇心に高めて、積極的に情報を収集し、吸収、咀嚼しようとする習慣がついていない学生もまた多い。あるいは自分に対する評価や進路、極端には「就活」以外ほとんど関心がない学生や、ごく限定的なことにしか興味を示さない学生もいる。

教育機関としての大学は、このような学生の潜在的な知的欲求の芽を引き出し、「なぜ」「ではどうすれば」「自分ならどうする」と常に問う力、考える力を育てなくてはいけない。大学という知の集積する場こそ、それが可能であると考える[1)]。そして、そのためには

1）大学のあり方、大学教育を考える上で以下の文献が参考になった。鷲田（2013）、増田（1966）、阿部（1997）、村上（2009）隅谷（1981）。

基本的な知識やアカデミック・スキル、すなわち読み、書き、まとめ、伝える力の習得は欠かせない。それなくしては、学生の知的好奇心を学問的関心に高めることはできない。

筆者は2011年度より大阪商業大学（以下、本学）で、初年次演習科目（「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」）、アカデミック・スキルを習得する科目（「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」）、課外の学習支援講座（「ライティング講座」）を担当してきた。まさに、学生の知的好奇心を引き出し、学修・学習への意欲を喚起し、アカデミック・スキルを習得・向上させ、他の教養科目や専門科目へと橋渡しをすることを目的とする科目群である。その教育実践の内容と成果は『大阪商業大学論集』で詳細に報告してきた。

2013年度後期は、本学での教育活動の集大成の学期と位置づけ、これまでの教育実践の成果を融合した授業実践を展開した。重点を置いたのは次の点である。①学生の知的好奇心を引き出し、学生同士が互いの興味関心を知ることで刺激を与え合う機会をつくること、②学生が授業の目的や課題の意図を理解した上で能動的に学び、情報の受け手から発信する側になることである。その内容と成果は『大阪商業大学教育活動奨励助成報告書　学生の参加意欲を喚起する授業方法に関する研究・実践』所収「アカデミック・スキル科目における主体性の引き出し方の工夫」で報告した。そこでは主に②の重点課題、すなわち学生が授業の目的を理解して能動的主体的に学習に取り組めたかについて検証した結果、学生は筆者の意図した授業のねらいを充分に理解し、そのねらいに沿った学習成果を挙げたことは明らかであり、一連の試みは有効であると結論づけることができた。

そこで本稿では上述の①に焦点を絞り、学生の潜在的な、漠然とした興味関心を知的好奇心に高め、それを互いに披露して知的交流をはかることによる効果と、そのような取り組みを効果的に行うための要素について検証する。

以下、第１節では、これまでの教育実践から得た知見と残された課題について振り返る。第２節では、第１節で提示された課題を克服するための授業実践について報告する。第３節では学生の知的好奇心を引き出す教育実践で明らかになったこと、第４節では知的好奇心を引き出すために必要な要素について考察する。

対象とした科目は、本学の初年次生向け後期必修科目「基礎演習Ⅱ」 と、アカデミック・スキルを学ぶ２年次以上向け演習科目「学習リテラシーⅠ」および「学習リテラシーⅡ」 である。

１　これまでの実践と課題

本節では、これまでの教育実践で得た２つの知見を整理する。一つは、学生が取り組もうとする課題の条件について、もう一つは、知的交流が促す能動的な学習態度についてである。

1―1　学生が取り組もうとする課題の条件

本学に着任した2011年、筆者がもっとも注力したのは書く力の養成である。科目や学年、テーマや字数など、諸条件が違うライティング課題への取り組み姿勢や提出率、課題の出来

を比較したところ、学生が「書ける・書こうとする」課題の条件が浮かび上がってきた。その条件とは、①関心を持てる課題を構想段階からていねいに指導すること、②書く必要性のある課題を設定すること、③他者に読まれることを意識して書くような場を設定すること、④やりがいを感じる程よい難易度を設定することである[2)]。以下に説明を補足しておきたい。

①の「関心を持てる課題」、④の「やりがいを感じる」課題というのは、ただ学生が好きなこと・思いつくことをやらせればよいということではない。自分の経験や内面だけをいくら振り返っても、新たに生み出せるものは知れている。知識や見識、興味関心を広げ、深めることができてこそ大学で学ぶ意味がある。今の学生は決して社会問題や科学的なテーマに関心がないわけではない。むしろ学生は、やや硬派な社会問題を扱う課題の方がやりがいを感じるのである。

①の「構想段階から指導する」というのは、書くまえの準備、書き方に関して放任せず、素材のみつけ方、読み方、まとめ方を手ほどきするという意味である。適切な知識や情報を得ることの大切さとその方法を徹底して刷り込み、作法を守った文書（文章）を作成するよう指導することが大切である。このとき必ず学生自身で「問い」を立てるよう意識づけをすること、教員や受講生同士が対話を通して思考や発想を広げることが重要である。「なぜ」「どこがどのように重要なのか」「自分はなぜそこに関心を抱くのか、自分と社会にどう関わりがある問題なのか」「ではどうすればいいのか」と問うことを促すことが欠かせない。

以上の条件は「文章を書く」という形態以外、例えばレジュメ作成や口頭発表においても有効である[3)]。

1―2　知的交流が生み出す能動的学習態度

どのような課題であれば学生が「書ける」のかがわかったので、2012年度は学生がより能動的に参加しようとする授業のあり方について検討した。

能動的学習（アクティブ・ラーニング）には様々な手法があるが、重要なのは手法そのものではない。学生間および学生と教員との間に知的で刺激的な交流をつくることが学生の授業や学習への意欲および学習効果に大きな影響を及ぼすのである。とりわけ学生間で刺激を与え合う環境があると学生のスキルと学習意欲は向上する。

知的交流の生み出し方にはさまざまな方法がある。グループワーク、ミニッツペーパーに寄せられた感想や意見、質問を授業に反映する、個人で取り組んだ課題を仲間と協働で一つの発表に仕上げるなどである[4)]。科目の性格や履修条件等に合わせて、これらを組み合わせたり応用したりすればよい。ただし基本的な学習の作法をていねいに反復訓練することも並行して行うことが肝要である。そうすれば学生は楽しみながら力をつけるのである。

本節で述べた２つの柱を意識した授業を展開すれば、学生は意欲を持って学習に取り組み、アカデミック・スキルも向上することを実践で確認できたが、課題も浮かび上がってきた。それは問題関心をもつことが苦手な学生、大学での学びそのものに期待や意欲を持って

２）詳しくは橋本（2012）。
３）詳しくは橋本（2013b）。
４）詳しくは橋本（2013b）。

いない学生の存在である。問いを立てること、テーマをみつけること、発想を広げて調べることが不得手な学生は、必ずしも学業成績、課題への取り組み姿勢、友人や教員との人間関係が悪いとは限らない。そのため単位履修の点では問題はないのだが、学生が大学での学びに期待や意欲を持てるよう導くことに初年次教育やアカデミック・スキル科目の存在意義があることを考えると、こうした学生が主体的に問題を発見する力を伸ばし、大学で学ぶことを楽しめるようになるにはどのような動機付けが有効かを検討する必要性を感じるようになった。そこで考案したのが次節以降のプログラムである。

2　学生の知的好奇心を引き出す授業実践

本節では、学生の知的好奇心を引き出しながらアカデミック・スキルを向上させる授業実践について報告する。

2―1　実践のねらいと検証の方法

本学学生は学習経験（新聞を読む、本を読む、図書館を使って調べものをすること、グループワークなど）が少ないことを自覚している[5]。経験が少ないために資料を活用できない、そのために学問に期待や関心が持てない、自信がもてないというのであれば、経験を積めばよい。

そこで、学生の知的好奇心を引き出しながらアカデミック・スキルを習得させる方法として、信頼性の高い多彩な資料に触れること、特に図書館を見て回ること（ブラウジング）の有効性を強調したい。

2013年度後期の授業では、図書館の書架を見て回り、新聞、雑誌、参考図書といった多様な資料の現物を手に取る機会を何度も設けた。そのなかから、おすすめの記事や図書を見つけ出し、授業で紹介した。

橋本（2014）では、このような授業の目標やねらいが達成できたか、学生が授業の意図を理解したかどうかを詳しく検証した。検証方法は、受講生自身と、授業に協力いただいた教職員[6]に、当該学期の授業の目標や課題のねらい、その効果や気づきを記述してもらう形をとった。筆者が欲しい答えに誘導しないようにするため、そして筆者が意図しなかった効果や気づきを聞き出す可能性を残すため、「○○は役に立ったか」「××の課題で△△力は身に付いたか」という具体的な問いかけはしなかった。こちらの意図やねらいがまったく通じていなかったという残念な結果が出るおそれもあったが、学生、教職員の双方から、授業の意図を理解し、実践の効果を認めた記述を得られた。

5）2012年度の学生成長サポート調査（ベネッセ実施）によれば本学学生は、「インターネットで情報を検索する」経験の有無については肯定的な回答が半数を上回ったが、「わかりやすい文章を書く」「新聞やニュースから社会のことを知る」については半数弱、「自分の意見や考えを発表する」「グループワークやディスカッションをする」は2～3割、「必要な情報を図書館で調べる」に至っては2割を切っていた。

6）図書館を使う授業では縣千晶氏はじめ図書館職員の方々に協力をいただいた。「基礎演習Ⅱ」の「まわしよみ新聞」と雑誌記事のプレゼンテーション時には、非常勤講師の平岡光太郎氏、望月詩史氏に協力いただいた。「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」は非常勤講師の榎本恵理氏との合同授業の時間を多くとった。記して感謝したい。

事項では、具体的な実践内容とねらい、実践の効果について紹介する。

2―2　実践方法

本項では授業実践の方法と各課題のねらいを整理する。

2―2―1　新聞を通して社会への関心を高める

新聞は社会科学系の大学生に日々親しんでほしい情報源である。新聞を使った授業実践（「教育に新聞を」＝ NIE）は小中高校を中心に豊かな蓄積があり、関連書籍や論文も多い[7)]。大学では、小中高校での取り組みのような組織的な活動は低調のようである[8)]。もちろん、教員が、科目に関連する記事を配布して解説したり、学生が演習で記事を収集してスクラップブックを作ったり、レポートや論文の素材として調査したりすることは通常の授業実践として行われているが、それらはその科目に直接関連する記事を収集するものがほとんどである[9)]。

【表１】新聞を使った課題

方法	課題のねらいと効果[11)]	備考
課題①　まわしよみ新聞（考案：陸奥賢氏）[10)]		
①５人程度のグループに分かれて、興味を持った記事を３つ切り取る。②記事内容や興味を持った点を順に一つずつ発表する。③画用紙に記事を貼り付け、コメントやイラストを書き加えてオリジナルの壁新聞を作る。④できあがった新聞をクラス全体に発表する。	・新聞に親しむ ・自分やクラスメイトの興味関心を知る ・グループでのコミュニケーションを深める ・プレゼンテーション力をつける	・120分あれば理想的（１グループの人数を少なくする、または２～３週に分ける方法もある） ・新聞、文具、広い机が必要
課題②　いろいろな新聞を知ろう		
図書館２階に配架してある新聞のうち４紙を読み、一面トップ記事をワークシートに要約する。（スポーツ紙と全国紙は対象外とした）	・様々な新聞に触れ、各紙の特徴を理解する ・図書館を利用する ・要約の訓練	・普段目にする機会の少ない新聞に触れることを重視する場合は、新聞を限定するとよい
課題③　お気に入りの新聞記事を紹介しよう　④　イチオシ記事コンテスト		
課題③関心をもった記事を要約し、わからない言葉の意味をワークシートに記入する（４件以上）。 課題④そのうちもっと気になった記事について400字の感想文を書き、毎日新聞「イチオシ記事コンテスト」に応募する。	・新聞を手に取り、読み、理解し、考える ・自分がどのような記事に興味があるのかを自覚する。 ・選択眼を養う ・自分の意見を文章化し、外部のプロに読んでもらう	・「イチオシ記事コンテスト」には479作品の応募があった。うち最優秀賞１、優秀賞５、佳作10作品の全文が毎日新聞2014年１月５日付紙面に掲載された。「基礎演習Ⅱ」の受講生一名が佳作を受賞した。

筆者が本学で担当するのは分野を特化しないアカデミック・スキルを習得する科目であ

り、学生の知的好奇心を引き出すという目的がある。そこで、【表１】に挙げた課題①③④では取り上げる掲載面や分野を指定しないことにした。

2―2―2　おすすめの参考図書、雑誌記事を紹介する

次に取り組んだのは、新聞記事を使った課題からの連想で生まれたオリジナルのプログラムである【表２】。学生のみならず教員にとっても視野が広がる、図書館の底力を実感する課題である[12)]。

3　実践の効果とその要因

3－1　学生はどのような分野に関心をもったか

さて、新聞、参考図書、雑誌を手にした学生たちはどのような分野やテーマに関心をもっただろうか。

学生が選んだ「お気に入り」の新聞記事を分野別に【表３】にまとめた。実施人数は「基礎演習Ⅱ」27名、「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」８名の計35名である。新聞という媒体の特性上、その時々の重大ニュースやスポーツの話題に関心が集中するかと予想したが、思いのほか分散した。具体的なニュースで多かったのは、台風関連の８件が最高で、つづく食品偽装問題が５件、体操の内村航平選手関連が４件、プロ野球の田中将大選手関連が３件である。

次におすすめの参考図書と雑誌記事を分野別に集計したのが【表４】である。新聞記事同様、制限や条件を設けなかった参考図書でも、学生の関心は各分野（日本十進分類法でいえば「綱」のレベル）に満遍なく散らばった。「綱」よりも一段階大きな分類で見れば、社会科学の割合が高いといえるだろう。

おすすめの参考図書の紹介は他の課題以上に各人の個性が浮き彫りになって、学生間の相互理解が深まる効果がある。学生の集中度も高い。その要因を分析すると以下の通りである。①あらゆるジャンルから自分の興味関心に合うものを探すことができる。かなりマニアックなものもあるので、これはというものをみつけやすい。②図版が豊富なものが多く、読みやすい。③手が出ないような高価な本、古い本を手に取れる。④通読しないでよいので

7）なかでも中西（2012）の「新聞活用の三段階」は今回の一連の課題を考案する上で多いに参考になった。以下の新聞を使った３つの課題は、まさしくこの新聞活用の三段階「新聞に親しむ」「新聞を読む」「新聞で考える」に合致したシリーズになったと考える。ほかに曽木（2013）、妹尾・枝元（2008）も参考にした。

8）新聞社が主催する新聞記事を使った各種コンテストでも大学生の参加が低いようで、日本新聞協会主催のHAPPY NEWSというコンテストは、「これまで応募の少なかった大学生に、もっと紙の新聞に触れてほしいとの思いから」2013年度から「大学生大賞」を設けた。日本新聞協会 HP「よんどく！」http://www.readme-press.com/happynews/entry/check_univ.html（2014年３月31日最終確認）

9）新聞を活用した授業実践に関しては以下が特に参考になった。柏崎（2013）、園屋（2005）、棚田・伊藤（2006）、平石（2007）、川住（2006）。

10）まわしよみ新聞 HP　http://www.mawashiyomishinbun.info/

11）【表１】【表２】の「課題のねらいと効果」は受講生および授業に協力していただいた教職員から得た所見と一致している。

12）図書館を活用した授業を企画するに当たって以下の文献が参考になった。高橋（2012）、久松（2012）、近田（2013）、高田（2007）、田中（2003）。

【表２】参考図書と雑誌を使った課題

方法	課題のねらいと効果	備考
課題⑤　おすすめの参考図書を紹介しよう		
①図書館参考図書コーナーで気に入った図書を選び、紹介する。②聞き手はプレゼンテーション評価シートにコメントを記入する。③優れた発表者を相互に選ぶ（後日表彰）。	・図書館で参考図書に触れる機会をつくる。 ・自分と仲間の興味関心を知る（自覚する）。	・図書館６階参考図書コーナーおよび多目的室を２週にわたって使用 ・表紙とおすすめのページを大画面で提示すると効果的。
課題⑥　おすすめの雑誌記事を紹介しよう		
①図書館雑誌コーナーを５ブロックに分け（誌名の50音順）、ブロックごとに１冊、計５冊の雑誌を読み、おすすめの記事を紹介する。②ワークシートに５記事の出典と簡単なメモ、分からない言葉の意味を記入する。③グループ（６～７人）に分かれておすすめ記事を紹介する。④各グループで一番盛り上がった記事をクラス全体に発表する。	・雑誌の種類の多さ、雑誌から学べることの多さを知る ・まとめる力、発表する力を高める ・グループワークを通じてコミュニケーション力をつける。	・クラス全体への発表のときには雑誌の表紙と誌面を前方の大画面に映写すると効果的。 ・プレゼンの回にはゲスト講師を招いて各グループに教員がファシリテータとして１人ついた。

【表３】学生が選んだ「お気に入りの新聞記事」

分野	延べ記事数
経済・金融・企業活動	28件
スポーツ	21件
生活・社会	20件
文化・教育・科学・自然	14件
政治・国際（原発関連含む）	11件
自然災害	11件
事件・事故	4件
計	109件

※分野：記事内容と掲載面を考慮して筆者が分類
※実施期間：2013年10～11月
※出典の記載不備などで確認できなかった記事は省いてある
※「お気に入り新聞記事」用ワークシートは４件分の欄を設けていたが、ワークシートを提出したがコンテスト応募ができなかった、またはその逆という学生が数名いたため、件数は人数に比例していない

選書のハードルが低い。⑤そのため、プレゼンテーションしやすい。かつ、聴く人に面白いと感じてもらえそうな箇所を発見しようという意欲がわく。

これは図書館利用のガイダンスとしても非常に利点の多い、おすすめの課題である。企画

【表４】「おすすめの参考図書」「おすすめの雑誌記事」の分野別件数

日本十進分類法（NDC）に基づいて２次区分表に照らして分類

類	分野（NDC の「綱」）	参考図書		雑誌記事		
		件数		雑誌数	件数	
総記	05　逐次刊行物			7	13	
	小計			7	13	(14.1%)
歴史	20　歴史	1		2		
	28　伝記	1				
	29　地理、地誌、紀行	2				
	小計	4	(10.0%)	2	3	(3.3%)
社会科学	30　社会科学	2				
	31　政治	2		2	6	
	32　法律			1	1	
	33　経済	1		12	27	
	34　財政	2		2	2	
	36　社会	3		2	2	
	37　教育			1	1	
	38　風俗習慣、民俗学、民族学	2				
	小計	12	(30.0%)	20	39	(42.4%)
自然科学	40　自然科学			1	4	
	42　物理学	1				
	49　医学、薬学	2				
	小計	3	(7.5%)	1	4	(4.3%)
技術工学	53　機械工学、原子力工学	4		1	1	
	54　電気工学、電子工学	1				
	55　海洋工学、船舶工学、兵器	1				
	58　製造工業			1	2	
	59　家政学・生活科学			1	1	
	小計	6	(15.0%)	3	4	(4.3%)
産業	67　商業	3		5	14	
	68　運輸、交通	2		3	3	
	小計	5	(12.5%)	8	17	(18.5%)
芸術　美術	72　絵画、書道	2				
	77　演劇、映画			1	4	
	78　スポーツ、体育	7		2	6	
	小計	9	(22.5%)	3	10	(10.9%)
言語	80　言語	1				
	85　フランス語			1	2	
	小計	1	(2.5%)	1	2	(2.2%)
	計	40	(100.0%)	45	92	(100.0%)

注１）いずれも実施人数は「基礎演習Ⅱ」28名、「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」８名の計36名。実施時期は2013年12月。

注２）「おすすめの参考図書」については「学習リテラシー」では複数冊の紹介を課したが、記録し損ねた分が生じてしまった。そのため実施人数と延べ冊数が一致しない。

注３）「おすすめの雑誌記事」のワークシートには５誌分の記入欄を設けたが、プレゼンテーションには参加したもののワークシートをすべて埋めて提出することができなかったり、修正のため返却したワークシートを再提出しなかったりした学生が複数名いたことから、総計は実施人数に比例していない。

運営で協働していただいた図書館職員の縣千晶氏は、この課題をアレンジして地元中学生の職場体験プログラムの一部に取り入れられた。３人の中学生は各自書架からおすすめの参考図書をみつけ、解説文を書き、熱心にお互いに内容を検討し合ったとの報告をいただいた。

おすすめの雑誌記事紹介では、やはりさまざまな分野の雑誌の記事が取り上げられたが、参考図書よりも社会科学系の割合が顕著に高い。これは、この学期の最後の課題ということで、ハードルを上げるべく、いくつかの条件を設けたためではないかと見ている。その条件とは、普段から気軽に手に取るような週刊誌類のコーナーは対象外にして、比較的「堅い」専門誌から選ぶよう指示したこと、一つの雑誌から５記事選ぶのではなく五十音順で機械的に５ブロックに分けて１ブロックにつき１記事を選ぶよう指定したことである。このように若干の制限があったことに加え、商業大学である本学の図書館が所蔵する雑誌には社会科学系が多いこと、経済系雑誌に学生の一番の関心事と言ってよいだろう就職活動を特集した別冊が出ていたことが影響しているのであろう。それにしても、書架での出会いを重視して、データベース検索などはしなかったのに、学生が専門的な雑誌からうまく興味をもてる記事を見つけることには感心した（次項でその事例を紹介する）。

おすすめの雑誌記事の紹介は、教員にとっても発見の多い、面白いプログラムである。最近ではインターネットによる資料検索が進化したことで部屋にいながらにして資料を集めることができるようになったが、学生と一緒に雑誌を見て回り、専門外の雑誌に触れ、ファシリテータとしてグループワークに参加し、雑誌の記事をもとに学生とあれこれと話すことは、実に楽しく知的な時間である。新聞や雑誌は定期的に刊行されるので、何度実施しても新鮮な話題が尽きないという利点もある。

このように多様な分野について資料を読み、互いに紹介することを楽しむというプログラムができるのは、初年次演習やアカデミック・スキルを学ぶことに特化した科目ならではである。図書館での授業に協力していただいた縣氏からそのような所見をいただき、この種の科目の意義と可能性をあらためて確認することができた。

以上、本学学生の関心は多様な分野に渡っていること、割合としては社会科学分野が高いことがわかった。今どきの学生は社会問題に関心がないなどということはないし、機会さえ作れば新聞や参考図書、専門性の高い雑誌を読むこともわかった。学生の集中度も非常に高く、しっかりと資料の要点を読み取り、他者に紹介することができた。事項では、これらの実践で見られた学生の変化について紹介したい。

3―2　実践の効果

多様な分野の資料に触れ、おすすめを紹介する授業は、明確な学問関心や将来の目標、職業意識を持っていない学生や、真面目ではあるがグループワークや発表に苦手意識がある学生にとっても好ましい効果を生むことが確認できた。具体的な事例を紹介する。

単位を取れさえすればいい、成績にはこだわらない、乗り物しか興味がないと言っていたグループがあった。彼らはスキルやコミュニケーション能力が低いわけではないが、自己を振り返って将来に向けて決意を表明するような類の課題には気が乗らない様子だった。

ところが参考図書の課題で趣味に関連する書籍を見つけると「これなら一日読んでも飽きない。図書館は面白い」と熱中するようになった。雑誌の課題もはじめは興味がもてなさそ

うだったが、『高速道路と車』『航空技術』といった雑誌を発見すると、その後は自力で『憲法判例百選』から自動車事故の判例を見つけるまでに至った。自分たちの趣味に関する本や雑誌が図書館にあることを知って、図書館という場や専門的な資料への抵抗感が減り、「鼻がきく」ようになったのである。

彼らは「おすすめ」を紹介する課題が終わってからの学習態度が目に見えて積極的になった。後期の学習をふりかえる「まとめレポート」では各課題の意図をよく理解した記述をしていた。空き時間には筆者が担当する学習支援講座に足を運び、筆者の担当科目に限らず、課題やレポート作成に積極的に取り組むようになった。そして、彼らを核にして他の学生も授業外の学習に加わるようになっていったのである。

また、おすすめを紹介する課題は、グループワークや発表に苦手意識があり、クラスメイトと関わることに消極的だった学生にも顕著なプラスの効果を生んだ。この学生は日頃からファンタジーやSF小説をよく読んでいて、その系統の図書や記事をうまく見つけて紹介した。その一貫性が周囲に認識され、クラスで独特な存在感を発揮するようになった。いわゆる「キャラが立った」のである。クラスメイトとのコミュニケーションが増えるにつれて笑顔も見られるようになり、発表に苦手意識があったとは思えないまでになった。

こうした変化や成長は、ただ好きなことを好きなように発表させれば促されるというわけではないことを再度強調しておきたい。一定水準以上の資料から自分の興味や関心にあった情報を見つけて、アカデミックな作法でまとめ、発表することが自信ややりがいにつながるのである。

4　知的好奇心を引き出し、知的交流を生み出す要素

最後に、本稿で紹介した授業を成功させるには、どのような環境や仕掛けが有効かを考察する。授業の方法や進め方、題材、テーマ、資料以外に、どのような要素が学生の知的好奇心を刺激し、知的交流を生み出すのだろうか。

4―1　空間（設備、施設）

物理的な環境は授業の成否に大きく作用する。科目によって最適な環境は多少違ってくるが、今回のようなアクティブ・ラーニングを実践するには、次の条件を満たす教室が望ましい。①充分な広さと席数があること。机の面が広くて作業がしやすいこと。ただしあまりにも広い空間に少人数では落ち着かないし、教員の声が通らなくなる。②学生同士が交流しやすいこと。机や椅子が動かせること。教卓に向かって全員が同じ向きで並ぶよりも、いくつかのテーブルの島をつくる方が望ましい。その方が教員も学生の横や背後に立てるので、「指導」「監督」というより助言に回るという雰囲気をつくることができる。③柔らかい雰囲気と緊張感をバランスよくつくれること。絨毯敷きで丸みのあるテーブルがあるとよい。④無線LANでノートPCやプリンタが使えること。

プログラムによって場所を変えることも有効である。図書館で一部の授業を行ったことは学生の授業態度に良い影響を及ぼした。本学の図書館は広く明るく開放的であり、かつ、地

域の人や他の学生も利用しているので、程よい緊張感もある。書架を見て回れるので、90分じっと座っていなくて良い。授業後も残って作業ができる。図書館での授業では、参考図書の配架している6階の多目的室でレクチャーやプレゼンテーションを行ったが、この部屋が実は上記の①～④の条件をすべて満たしていたことは大変効果的であった[13)]。

4―2　人

学生の間に知的交流が生じると授業への意欲や課題の出来に良い影響を及ぼす。特に初年次生にとっては、ほかの学生が何を選び、どう発表するかを知ることが良い刺激になる。クラスの雰囲気は構成メンバーの個性や性格の組み合わせによるところが大きいので、そのクラスに合った指導をする必要がある。

2013年度に一年間担当した初年次演習2クラスは、どちらも男子ばかりで人数も同じ（16名）だったが、入学オリエンテーションのときからすでに「すぐに静かに集中して課題に取り組むクラス」と「仲が良くて活気があるクラス」に明確に分かれていた。このようなクラスを比較して、どちらかに近づくように指導するのは困難であるし、あまり意味がない。それぞれのクラスの良い面をほめるようにしたところ、その長所がますます際だっていた。特に違いが出たのがプレゼンテーションで、前者のクラスは見本や指示に沿って準備するので発表内容が充実し、甲乙つけがたい出来になった。特に、真面目に取り組む学生群は非常に優れた課題を仕上げることができた[14)]。後者の活気のあるクラスは、発表内容にはやや個人差が生じたが、グループやクラス全体で楽しむ雰囲気が醸成され、発表やグループワークに苦手意識のある学生でも活躍できた。前節で挙げた事例のように学生の学習意欲での変化が著しかったのはこちらのクラスである。

そのような個性の違いはあっても、一年間を通して両クラスの全体の出席率、課題提出率、課題の出来栄えに大きな差がなかったことは興味深い。つまり本稿で取り上げたプログラムは、どのタイプのクラスや学生にも有効であるといえよう。

それを可能にしたのは、教職員の協力があったからということも書き添えておきたい。本稿で取り上げたプログラムの多くは、図書館とゲスト講師、同じ科目を担当する教員の協力を得たことで充実した。複数の教職員が授業に関わることは、授業中の学生への指導がていねいになるだけではなく、別の視点からの観察が加わることで教員一人ではわからないことが見えてくるという利点がある。チーム・ティーチングの導入はもっと検討してもよいのではないかと考えている[15)]。

4―3　仕掛け

淡々と15回の授業を進めるだけではなく、メリハリをつけることも効果的である。

例えば今回は全員で中盤に新聞社のコンテストに応募した。それによって学生はプロの編

13）この多目的室はやや横長で、入って奥の白い壁面にPC画面などを映写することもできる。テーブルは勾玉型のものを指定して使用させてもらった。勾玉型は仲間との距離が近くなり、堅苦しさがない。グループワーク時も顔を見渡しやすく使いやすかった。
14）その一部は2014年度の初年次演習や「学習リテラシー」のテキストに見本として掲載した。また、新聞社のコンテストで受賞者が出たのはこちらのクラスである。
15）詳しくは橋本（2014）。

集者に文章を読んでもらえたという達成感を得られ、「新聞に親しむ」「新聞を読む」「新聞で考える」[16] 3つの課題の意味や効果を確認できた。結果、初めての挑戦で入賞者を出すこともできた。今後もこのような学生が活躍出来る場を探して挑戦してみたい。

イベント性のある「お楽しみ」を差し挟むのも良いだろう。「基礎演習Ⅱ」の両クラスでは、縣氏と学生の投票により、おすすめの参考図書の紹介で優れた発表をした学生を選び、3～4名を表彰した。両クラスとも全員が発表をやりとげたので、年末に表彰式を行い、縣氏とゲスト講師、受講生全員にささやかなプレゼントを贈呈し、図書館を使った一連のプログラムをしめくくった。

よく出来たワークシートや先攻クラスの完成物を見本として示すのも効果的である。到達点や完成形を見える形で示すと学生はスムーズに課題に取り組む。筆者は同じ科目を複数クラス担当しているので、他クラスの良い見本を示すことは、別のクラスの競争心をくすぐることにもなった。

見本は前年度の学生のものでもよいし、ほかの教員と協力して互いに調達することも可能である。例えば「まわしよみ新聞」は、授業に先立って学内の教員5人でワークショップを開催し、そのときの作品を見本にした[17]。前項のチーム・ティーチングとも通じるが、このような担当科目や専攻分野を超えた教員間の知的交流を促進し、授業改善につなげる試みも積極的に取り組みたい。

おわりに

本稿では、学生の知的好奇心を刺激し、大学での学びに意欲を持つきっかけを作る授業実践について報告した。学生はさまざまな分野に興味を持っている。特に社会の問題に関心をもっていることがわかった。そのような学生の興味や関心は信頼性の高い資料に数多く触れることで学問的関心に高めることができる。自分や他者の興味関心がアカデミックな研究の対象になることを知ることは、学生の視野を広げ、学習への意欲を向上させる。文章や発表で自分のおすすめを人に伝えることはアカデミック・スキルも向上させ、自信につながる。特に初年次にこうした経験を積むことはその後の学修におおいに良い影響を及ぼすだろう。

これは大学の初年次生のみに有効ということを意味しているのではない。2年次以上の学生のクラスは、人数が少ないこともあって課題への取りかかりが非常に速く、高い集中度で課題を次々に完成させた。結果、1年生よりも多くの資料に触れることが可能となった。2年次以降もアカデミック・スキルは磨いていく必要がある。このようなプログラムを継続し

16）注7参照のこと。

17）教員向けワークショップは2013年9月25日本学学修支援センターで開催した。専任教員4名（宮坂朋幸准教授、吹原顕子講師、小出輝章講師と筆者）、非常勤講師1名（榎本恵理講師）で行った。教員には、筆者が参加した「夏休み親子まわしよみ新聞」の様子を写真で提示した（2013年8月4日に江之子島文化芸術創造センターで開催。主催はDECO江之子島A&Lマネジメント）。ワークショップでの完成品は同センター内の学習サポート講座の部屋（6号館1階研究室）に貼り出し、見本として貸し出した。後期開始直後に、宮坂氏・吹原氏・河辺純准教授が授業に取り入れられた。各氏からは授業の進捗や学生の反応について報告をいただき、完成品を見本として貸していただいた。記して感謝したい。なお完成品の一部は本学6号館1階研究室で保管し、見本として閲覧できるよう公開している。

て実践できる科目や機会を大学が提供することは学生の基礎力を大きく向上させると手応えを感じた。このことを再確認するためにも、履修人数の多い前期に同様のプログラムを実践し、効果を出したいと考えている。

さらには、中学生の職場体験プログラムに応用できたことからも、大学生以外にも実践可能であると考える。むしろ大学に入るまでにこのような経験を積んでいれば、知ること、学ぶこと、人と知的な交流をもつことへの期待や意欲をもって大学に入学することができるのではないか。大学での学びにもすぐに適応できるのではないだろうか。大学に進学してもしなくても、学校を出てからも、その経験は社会生活や職業生活で活きてくるのではないか。今後は学内外の方々と協働して、さまざまな場での展開を模索してみたい。

（謝辞）

本稿は大阪商業大学教育活動奨励助成費（助成期間平成24～25年度）を受けて行った教育活動の一部である。

参考文献

阿部謹也（1997）『「教養」とは何か』講談社

大野友和（2003）「図書館リテラシー教育と学生の反応「図書館活用法」の実践から」図書の譜⑺

柏崎秀子（2013）「新聞活用教育（NIE）の力を育成する大学の教員養成課程での授業実践」実践女子大学文学部紀要　第55集

川住隆一（2006）「全学教育科目基礎ゼミ　「新聞を通してみる障害児・者問題」の３年間の取り組みと成果」東北大学高等教育開発推進センター紀要１号

須藤義人（2004）「NIE 実践授業の学習デザインに関する一考察　メディアリテラシー修得を目的とした研究授業の事例」沖縄大学人文学部紀要　第５号

隅谷三喜男（1981）『大学で何を学ぶか』　岩波書店

園屋高志（2005）「大学生に対する情報教育の実践　～新聞の特性を考察させる授業について～」鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要　第15巻

妹尾彰・枝元一三（2008）『子どもが輝く NIE の授業』晩成書房

仙田志津代、冨田幸江（2006）「看護学生が新聞記事から捉えた心の健康と NIE の学習視点からの学びの分析　精神看護学講義における新聞記事の活用」紀要（つくば国際短期大学）34

曽木誠監修（2013）『学習に役立つ！なるほど新聞活用術①～③』　岩崎書店

高田高史（2007）『図書館が教えてくれた発想法』柏書房

高橋温子（2012）「情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語コース　カリキュラムの作成と実践報告」大学図書館研究　第96号

竹谷一郎（1983）「情報解析の基礎技術：新聞情報の活用」ドグメンテーション研究33　⑺

田中共子（2003）『図書館へ行こう』岩波書店

棚田鈴子・伊藤洋子（2006）「新聞記事を媒体とした社会への関心とリテラシーの啓発」飯田女子短期大学紀要　第23集

近田政博（2013）「大学生と大学教員に図書館をアピールする方法　教員の目線から」館灯（私立大学図書館協会）51

中西一彦（2012）「教科書新聞教材活用のための必要事項の一考察」関西国際大学研究紀要　第13号

橋本信子（2012）「大阪商業大学初年次教育科目におけるライティング指導の実践」大阪商業大学論集　第166号

橋本信子（2013a）「大阪商業大学「ライティング講座」の成果と課題」大阪商業大学論集　第168号

橋本信子（2013b）「能動的学習を促すための知的交流の場をつくる取り組み」大阪商業大学論集第170号

橋本信子（2014a）「書評作成を通した能動的学習　大阪商業大学初年次教育科目「基礎演習Ⅰ」における「おすすめの一冊」プログラム　2011～2013年」大阪商業大学論集　第172号

橋本信子（2014b）「アカデミック・スキル科目における主体性の引き出し方の工夫　「基礎演習Ⅱ」「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」における取り組み」『2012～2013年度大阪商業大学教育活動奨励助成費報告論集　学生の参加意欲を喚起する授業方法に関する研究・実践』

久松薫子、西脇亜由子（2012）「利用者教育における教員との協働　明治大学図書館の活動報告」大学図書館研究 XCVI

平石隆敏（2007）「中学校 NIE 授業との連携による「総合演習： NIE 入門講座」」京都教育大学教育実践研究紀要　第 7 号

増田四郎（1966）『大学でいかに学ぶか』講談社

町田守弘（2007）「サブカルチャー教材による国語科授業開発論：学習者の興味・感心喚起の方略を探る」早稲田大学大学院教育学研究科博士学位審査論文

三上彰（2010）「授業「大学での学びと経験」と図書館との連携による図書館活用の試み」 Obirin today：教育の現場から 10

村上陽一郎（2009）『あらためて教養とは』新潮社

柳父立一、福森貢、宮村裕子（2008）「IT を活用したアイス・ブレーキング～新入生を対象とした班新聞作り、 3 年間の成果～」年会論文集（日本教育情報学会）（24）

鷲田清一（2013）『パラレルな知性』晶文社

渡邊貴子（2013）「教員と職員の専門性をいかした協働の試み：教職科目における協働授業の実践」静岡大学教育研究　9